明治三十八年十月一日發行

明治三十七年五月七日第三種郵便物認可

明治の女子

愛をもて眞理を行ひ長ちて凡てのこと首なるキリストに效はしめんためなり（以弗所四〇十五）

第二巻第六號

女子基督教青年會とは何ぞや（四）　社説

氣質上の罪　しづのや

聖書研究　マクドーナルド

吹きよせ　しのぶ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

明治の女子

『明治の女子』は日本基督敎女子青年會の創立委員が發行する月刊の聖書研究錄なり。

『明治の女子』は一年分十二冊の定價郵稅を併せて金五十錢。

發行所は東京市麴町區土手三番町十五番地

日本基督敎女子青年會の創立委員は

委員長 ホイットマン嬢

幹事 ルキス嬢

ワージントン嬢
ウエスト嬢
津田(梅子)嬢
花井夫人
ヘルム夫人
ソイシヤー夫人
平野嬢
小崎夫人
エリス嬢
ソーバー嬢
フェルプス嬢
ハミルトン嬢
ザーフルー嬢
佐藤(錦子)嬢
河井(道子)嬢

萬國基督敎女子青年會日本支部幹事 モリソン嬢

同上 エー、シー、マクドナルド嬢

明治三十七年九月廿八日印刷
明治三十八年十月一日發行

(定價一册四錢郵稅五厘)
(一年分(十二册)郵稅共五十錢)

東京市麴町區土手三番町十五番地
發行兼編輯人 エー、シー、マクドナルド

東京市京橋區築地二丁目二十番地
印刷人 河本龜之助

東京市京橋區築地二丁目廿一番地
印刷所 株式會社國光社

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

明治の女子　第二卷第六號　明治三十八年十月一日發行

明治の女子

女子基督教青年會とは何ぞや（四）

英國女子基督教青年會

千八百五十五年の頃、英國の一婦人、女子の感化力の偉大なるを信じて、一個の婦人會なるものを組織したり。これ蓋し英國に於ける婦人の事業の嚆矢なりしならん。同年また倫敦に職業を求めて、地方より來る青年女子のために、寄宿舍を設備するの擧あり。これが創立者キチャード氏と青年女子祈禱同盟の創設者ロバード孃とは、互に相知らずして、各都市に小寄宿舍を設けて、おのが事業を擴張し來りしが、計らず彼此同一の事業を爲しつゝあることを知りて、各自の事業を合併し、これを女子基督青年會と改むるに至れり。

この事業の英國に於ける發達は、甚だ顯著にして、當初千八百五十五年創立の際には、倫敦に一家屋を有し、これとて僅に二室にて、その會員は三十名の少數に過ぎざりしが、現今に於ては、その數實に十萬人の多きに達し、英國の各地に渉りて、その支部百十六に及べり。而してその事業は看護婦、教師、工女、其他各種の職業に從事する青年女子の間に施され、非常の功果を來せるを見る。

女子青年寄宿舍は、英國に於て、やゝ大都市と稱すべき處には、すべてこれが設備あり。而して尙は諸種の敎育的事業として、讀書、裁縫、速記術、文學の如き、各方面に渉りて、青年女子の要求を遂げしめ、殊に聖書の研究の如き、到る處その機關の備はらざはなし。

また外國より職業を求めて、倫敦に來る青年女子のために、確實なる案内所を設けて、信用ある雇主の名を知り得るの便宜を與ふ。誘惑多きこの大都會に於て

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

かゝる事業は最もその必要なるものあるを見る。また英國內を旅行し、或は外國より入込み、或は外國に出發する婦人を保護するに、旅行者保護會なるものを設く。英國の大停車場には、大抵女子基督敎青年會の徽章を附したる婦人ありて、汽車の發着每に、乘客に對して諸種の便宜を與ふる也。

各種の製造場に於ける女子基督敎青年會の事業は、また偉大なる功果を收めつゝあるを見る。製造場に近く割烹店を設けて、これに讀書室、休息室を備へ、女工をして清新なる慰籍を得しむ。而して工場內にも特別に一室を設けて、正午に集會を催し、有益なる講話を聞かしむ。

他の諸國に於ては、女子學生に對する事業も、女子基督敎青年會に於てこれをなせど、英國に於ては、これを特別の事業として、英國學生基督敎青年同盟と稱する團體に於て、その事務を管掌する也。

我等は前後四回に涉りて、聊か歐米に於ける女子基督敎青年會の沿革及びこれが現況に就いて述べ得たるを信ず。尙ほ獨佛其他諸國の青年會に關する事項をも掲げたれど、その事業の種類、多くは英米に於けると同一なるを以て、讀者宜しくこれを推測せらるべし。

日本に於ける女子基督敎青年會の事業、尙ほ甚だ微々たるものありと雖も、一般の氣運その大に熟し來れるを見、我等は其活動の日、必ず遠きにあらざるべきを信ぜんと欲す。日露の和局漸く成りて、戰後の經營は今や各方面に着手せられんとす。我等基督の徒たるもの、この間に處して、大に祖國のために貢献するの覺悟なくして可ならんや。(終)

論説

氣質上の罪

しづのや

かの放蕩兒が、その父より得たる資産を耗盡して、おのが罪を悔ゐ、遂に再び故山に歸りて、その家庭に

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

よろこび迎へられしことは、これ人情の機微を描けるものとして、我等が常に讃嘆措く能はざる所也。されどこれと共に、彼が兄の心情を研究するも、亦た決して無益の業にあらざるべきを信ず。

彼は田畑に出でゝ、一日の務を終へ、いつもの如く、遙にわが家のともしびを望んで、たのしき歸路を急ぎぬ。やがてその門に近づくや、こはそもいかに、にぎやけき歌舞音樂の聲を聞く。彼は驚き走つてその家に入りしや。然らず。しばし戸外に佇んで、竊かにその情を窺ひぬ。かくて一人の僕を呼びて問うて曰く、これ何事ぞや。僕答ふるに實情を以てす。かくと聞きたる兄のむねには、妬心むら〳〵と起り來りて、咄、かの放蕩兒、流連荒暴の餘、止むなく家に歸り來れば、かくもにぎやかなる饗宴を設く、父が我等を過するの過れる、何ぞ一に玆に到れるやと。滿面怒氣を含みて、容易に室内に入るべくもあらず。

かくと知りたるやさしき父は、直ちに出でゝ、彼を導き入れんとしたりしかど、彼頑として動かず。見よ、くだけたる心をもて父に歸れる弟、かたくななる心をもて父に背ける兄、兩々相對し來れば、人をして無限の感懷を催さしむ。基督曰く、かの先なるものは後になり、後なるものは先になるべしと、われ轉たその言の欺かざるものあるを覺ゆ。

兄謂らく、おのれの如きは、幾久しく家に在りて、父の務を爲し、未だ曾てその命に背きしことなきに、父はわがために、一たびもかゝる饗宴を張りたることなしと。これ彼が當夜直に家に入ることを肯せざりし理由也。顧ふに、兄といへども、從來父の膝下にありて、家事に忠なりしことを驕るが如きあらざるのみか、これ子として爲すべき當然の事たることは、彼といへども、固よりよく知悉せる所也。然かも一旦、弟が放浪の極、窮困落魄、忍びがたき耻辱を忍びて、父のもとに歸り來るや、兄は直にこれをおのが身にひき較べて、慢心頓に浮動し來り、嫉妬の念抑ふるに由なく、私かにおのが平生の忠誠に對して、父が報ゆる處の甚だ薄きを謐きぬ。是に於て父は彼が家庭にありて、思

ふが儘に、その幸福を享受しつゝあるに想到すること能ざるを見、懇ろに告げて曰く、子よ汝は常に我と共に在り、またわが所有は皆な汝の屬なるにあらずやと。あゝ、兄たるもの、日夜この恩愛の露に浴せるに、また何の要ありてか、かく弟のためにその心を苦しむるぞ。はやなきものと思ひつるいとしきわが子、今やその罪を悔ゐて再び歸り來る、これがために饗宴を設くるは、これ實に父の至情にあらずや。

兄の境遇は、弟のそれに比して、遙に幸福なるものありしや疑なし。げに幾とし月の間、彼は忍耐と從順とをもて、家庭のために大に勉むる所ありき。然るを未だ一饗宴の彼がために設けられざりしは、即ち彼が常に父と共に住みゐたりしを以て也。然り兄に對する家庭の歡喜は、極めて沈靜に、また極めて堅實なるものなりき。されど、世の風波に觸れず、變化なき生活を送りしがため、却つて兄の心にやさしき愛情の發達を見ること能はざりしは、豈に遺憾の極にあらずや。

靜けき一條の流も、一たび懸崖に臨みては、奔湍珠を飛ばして、凄じき響を傳ふ。かの放蕩兒の兄が、日頃の柔順に似もやらず、父の勸むるをも顧みで、弟の饗宴につらなることを欲せざるが如き、さしもにおしき性質を有せしことは、彼自身といへども、或は豫知せざりし所ならん。されどこの時、彼がその額にあらはせし一時の憤怒が、いかにその宴の興趣を傷けしや、我等は容易にこれを察するを得べし。

ドラモンド博士がいへる如く、罪惡に二種あり。一は肉體上の罪にして、他は氣質上の罪なりとす。かの放蕩兒の罪は、即ち前者に屬し、その兄の罪は、即ち後者に屬するを見る。兄弟の罪、何れか最も重しとすべきや、我等は固より罪の上下を量るべき權衡を有せざれば、この罪は下品なり、かの罪は上品なりといふが如きは、必竟假設の言なるのみ。我等は高尚なる人の罪にして、却つて下等なる人の罪よりも、更に恕すべからざるものあるを想はざるべからず。憤怒し易き人、嫉妬に深き人、惡口を好む人を見て、こは彼の氣質なればとて、多くその罪を默過することあるは、我

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

等がよく知る所也。されど最も高尚なる品性を有すと稱せらるゝ人士にして、往々この氣質上より出づる罪惡に躓くものあるは、豈に大に注意すべき現象にあらずや。

僅に一滴の涙也、されどこれによりて、いかにその人の性情の優しきやを知るに足る。僅に一時の憤怒也されどこれによりて、いかにその人の氣質の慢れるかを察するに足る。げに人の一擧手一投足は、これ直に彼が氣質の屈强なる說明者にあらずして何ぞや。

晩暮遠く俗塵の境を脫して、靜に神の聖壇に近づきわが一日の生活を顧るに、歷々たる罪過の迹、覺えず我をして悄然たらしむ。願くは、われこれらの罪過をもて、夜每に基督と共に十字架につけ、新なるあしたの空に、層一層、きよき光明の氣を呼吸するに至らんことを。

聖書研究

使徒行傳

エー、シー、マクドナルド

第一週。聖書研究。
一。方法
二。目的
第二週。舊約聖書。準備
第三週。福音書。贖罪
第四週。使徒行傳。服役

●第一週。聖書研究。

ある人云へり『聖書は文學以上の價値あるものなれば、これが文學的價値を有することはいふまでもなし』。聖書を研究するには、非常なる能力を要す。『心をつくして主たる汝の神を愛すべし』。彼得前書三〇十五。提摩太後書二〇十五。約翰傳八〇卅一を讀むべし。我等にして若し神の眞理を窺めんがために與

へられたる心を披いて、よく聖書を研究するにわらずんば、いかで主の聖語をもてわが身の法となすことを得んや。

我等は、今聖書中の一書を研究せんとするに臨み先づ我等の全心を神に献げざる可らず。詩篇百十九〇九十七—百四。請ふ我等が研究の結果をして、この詩に言明せる如く、『われなんぢの法をいつくしむ』、『われ虚僞のすべての途をにくむ』と自らうたひ出づるの妙域に達せしめよ。

聖書は文學以上の價値あるものにして、神の聖言を錄せるもの也。故に我等はこれを研究するに當りて、祈禱の甚だ必要なるを見る。詩篇百十九〇十八換言すれば、聖書は神がその民に與へ給へる使命也神を畏るゝものには、皆なこの使命を授けらる。我等が神のことばを學び得んがために、理解の眼をひらき得るものは只神のみ。馬太傳七〇七、八。また我等が、この理解力をよく享受するの道は、只祈禱に在り。提摩太後書三〇十五。かつ我等が基督に似たるものとなるも祈禱によりて也。基督は祈禱の人なりしことは忘るゝ勿れ。馬可傳一〇卅五。路加傳十一〇一、『主よ、我等に祈ることを敎へたまへ』。

我等若し聖書を正しく研究せんと欲せば、尚ほ更に必要なる條件あり、即ち從順の德これ也。人は從順の門を通らされば、神の國に入ること能はず。馬太傳七〇廿一。約翰傳七〇十七。十三〇十七。使徒行傳十八〇九。『なんぢらの師は一人、すなはちキリスト也』。哥林多後書十〇五。

使徒行傳の研究中、請ふ我等はよく聖言を味ひてこれに從ふ力と導とを求め、神のみ心にかなふに至ることをもて、我等の目的とすべし。羅馬書十一〇卅三。哥林多後書五〇九。

聖書研究の目的に就いては、提摩太後書三〇十六、十七に記されたり。特に十七節に心を留むべし。これを見れば聖書研究には二重の目的あるを知るべし。第一、おのが人物の完くせられんがため—人格の建設。第二、もろ〲のよき事を行ふべき準備のため

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

—献身の事業これ也。

第一。人格の建設。我等の理想的人格はイエス、キリスト也。詩篇一〇。十五〇。十七〇十五。哥林多後書三〇十八。約翰第一書三〇一、二。變轉極りなき我等の生活に於て、とこしへに渝らざるものは、只我等の人格のみ。他の一切の事物、いつしか消盡し去りて、我等が神のみ前に立つ時には、只赤裸々たる人格を以て現はれざるべからず。キリストが世に降り給ひしは、即ち我等にまことの人格を建設せしめんがため也。彼は神のすがたによりて造られたる人間が、當に保有すべき性格の摸型を、その一生の間に發揮し給へり。馬太傳三〇十六、十七。十七〇五。

第二の目的に至つては、前述の如く、もろ〳〵のよき事を行ふこと也。それ基督教の根本主義は、即ち他人に仕ふることにして、聖書は神が我等に向てこの種の服役を求め給ふことを示すもの也。キリストの事業は利己のためにあらず。馬可傳十〇四十五彼が來りしは、人を使はんがためにあらず、人に事へんがためなりき。約翰傳十二〇廿—廿六。

聖書は神のいかなるものなるかを表明するもの也これイエス、キリストが神の性格を體現したるが如し。約翰傳廿〇卅、卅一。聖書はまた我等が神に對し、人に對して爲すべき神の聖旨を啓示するもの也馬可傳十二〇廿九—卅一。すべての人の義務を大別すれば、この二個の方面の外に出でず。聖書は即ちこれらのことを我等に教ふるもの也、されば神が我等にこの聖書を與へ給へる目的を心にとめて、これより神の聖旨の存する處を明かにせんことを勉むべし。

●第二週。舊約聖書。準備。

聖書は、いかなる部分といへども、他の部分と比較引照するを要す。聖書は六十六種の書より成る、されどこれらの書を通じて、終始一貫せる處のものは、即ち神が人類に對する默示を記述せる一事也。それ舊約聖書は世界人類の上に、將に照さんとする

一大光明を受くべき準備を啓示するもの也。約翰傳一〇九。基督のいで給ふまでは、人々は明かに神を見ること能はざりき。されど時到りて、我等は初めて基督のうちに神を見ることを得たり。約翰傳一〇十四。

我等は舊約聖書を讀んで、到る處一大期望の輝くものあるを見る。創世記三〇十五に於ける最初の豫言より、馬拉基書四〇五に於ける主の大なる畏るべき日まで、人々はみな罪の縲絏より救はるべき時期の到るを待ちたり。以賽亞書九〇六。五十三〇。この間、神は義しきまことの神として、自らおのれを顯はして、不從順なるイスラエルの子孫を導き給へり。かくてキリスト世にいでて、我等は初めて神は人類の父にして、めぐみと愛にみち給ふことを知るに至りぬ。約翰傳三〇十六。げにキリストは罪よりきよきに移るべき道を示し給へり。路加傳二〇十一羅馬書六〇十四、廿三。約翰第一書三〇二。加拉太書四〇六、七。六〇十四。

舊約聖書を播けば、また神が漸次その民に近づき給ひし痕を見ることを得べし。人罪を犯さざりしまでは、神は人と共にゐませしかど、罪出でゝ、神と人との間に一大溝渠を生じたり。創世記三〇廿四。されど舊約聖書は神が肉體をとりて、イエス、キリストうちにおのれを現はし給ふに至るまで、漸次その民に近づき給ひしことを示せり。神はその民のかしらモーセと語りて、自ら親しくその民と共に住むべき幕屋を建てんことを命じ給へり。出埃及記廿四〇十二—十八。廿五〇八、九。かくてイスラエルの民が、いよ／＼その居處に安んずるに至つて、神はソロモンに命じて、おのが榮光を表すべき宮殿を築かしめ給へり。列王記略上五〇五。歴代史略下二〇一。イエス、キリストいよ／＼神なる父を表現し給ふ時、その名をイムマヌエル—神我等と共にあり—ととなへられ給へり。馬太傳一〇廿三。かくて彼はまことの神の宮殿のいかなるものなるかを告げ給へり。約翰傳二〇十九—廿一。かくの如く、神は遂に

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

肉體をとりてその民のうちにやどり、悲苦を嘗め、裁判を受け、死の刑罰をさへ蒙り給ひぬ。約翰傳一〇十四。希伯來書五〇八。これみな神の愛を表現するものと知るべし。

されど時いたりて、キリストは告げて曰く、われ今この世より去るをよしとす。そは神いまより一層其民に近づき給ふを得べければなりと。約翰傳十六〇七—十四。十四〇七。彼汝等と共に在り、而して汝等の衷に在るべし。聖靈くだるによりて、神は今いよ〳〵我等に近づき給へり。凡そ神を信ずるものは、彼自身既に聖靈の宮となれる也。哥林多前書三〇十六—十七。六〇十九、廿。

神がわれに與へ給ひし宮殿は、今果して清く、けがれなきや否や。汝はわたひをもて買はれたるものなれば、よく神の榮光を顯はさゞるべからず。

●第三週。福音書。救贖。

イエス、キリストに關するよき音づれは、馬太傳二〇二にその要點を示さる。即ち王の降世にして、彼は人々の心に、その靈的王國を發見すべしと記されたり。詩篇四十五〇一。われ王のために働く。路加傳二〇十、十一。救主の降臨。約翰傳一〇一、十四、十八。神の子の出現。約翰がその傳のはじめに記したる、道は即ち神なり—道肉體となる—彼は父をあらはせり—の語を味ふべし。

我等は救主を求む。而してこの要求はイエス、キリストによりて完うせらる。馬太傳一〇廿一。路加傳十九〇十。馬可傳二〇十七。

我等は模範を求む。約翰傳十三〇十二—十七。彼得前書二〇廿一—廿四。

我等は主を求む。その力によりて我等はキリストの性格をおのれの身に表現するを得。約翰傳十五〇七。使徒行傳一〇八。哥林多後書九〇八。哥林多前書十〇、十三。主は罪にかち、善を行ふべき力を與へんと約し給へり。

福音書はイエス、キリストがすべての敵にうち勝ちて、おのれの民を治め給ふことを示すもの也。約翰

傳十二〇卅二。五〇廿四―廿九。馬太傳廿八〇十八―廿。馬可傳十六〇六十二。希伯來書十〇十二―十三。默示錄五〇八―十四。十一〇十五。

わが日毎の生活に於て、キリストはよく勝利を占め給ひつゝあるか。而して自我なるもの漸次にその姿をかくして、主のかゞやきこれに代りつゝあるか。約翰傳三〇卅。

●第四週。使徒行傳。服役。

イエス、キリストの使徒等が、人のために服役するは、避くべからざる要務なりき、げに神の民は救の福音を傳ふる使者也。我等は神よりうけたるものを以て、またこれを他人に分與せざるべからず。哥林多前書四〇二。啻に基督の最後の命令のみならず、その與へ給ふ聖靈によりて、世界人類のために働くべき也。約翰傳十〇一―十。殊に十節を味ふべし。かくの如くなるが故に、使徒等が聖靈の力を得て諸方に出で、道を傳へ、人を助けしことは、敢て怪しむに足るものなし。

使徒行傳一〇一を讀むべし。使徒行傳は路加傳のつゞきにして、記者のいへる如く、イエスが着手し給へる事業と教訓とに就いて、その經過の跡を記述したるもの也。されば記者は、イエスの昇天と共にその事業も終局を告げしが如き考を有せざりしは勿論也。

一方よりいへば、使徒行傳は、この社會に働きつゝある聖靈を以て、キリストがその事業を繼續したる記錄といふことを得べし。約翰傳十六〇七―十四使徒行傳一〇八、またキリストが教會に於て、その教訓を繼續し給へる記錄といふことを得べし。聖書の最後にある默示錄は、神の右にありて榮光のうちに輝ける、イエス、キリストの默示をしるしたるものなるが、(馬可傳十六〇十九)これによりて見れば、キリストはすべて贖はれはる世界の人類を迎へんとて待ち給ふことを知るを得べし。默示錄十三〇八。五〇九―十二。

默示錄十五〇三、四。十九〇六―八。この記錄せ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

られたる神の默示が、將に終らんとする一段を見るに、寶座(くら)のたゞ中に坐せる羔と、その前にかしこみて跪ける人々とあるを認む。默示錄七〇九―十七。

使徒行傳は、イエス、キリストの弟子等が、彼の命に從ひて行ひたる献身的服役の記錄也。使徒行傳一〇八。弟子等は主の力に信頼して、屈辱を忍び、艱苦に耐へ、富貴を求めず、榮譽を願はず、全くキリストの鑑にならひて、傳敎の途に上れり。使徒行傳二〇廿九―卅六。これ基督敎徒の最初の說敎也。而してこの說敎の功果に就いては、使徒行傳二〇四十一、四十二。四十七。六〇七を見るべし。

使徒行傳の眼目ともいふべきは、イエス、キリストその人にして、敢て哲學の方式を錄するにあらず換言すれば一個の人格―弟子等が基督に對する敬慕の心を描くにあり。かくの如き敬慕の情と、交通の親とを以てせば、何人も誠實なる生活を送りて、罪より救はるゝを得るや必せり。使徒行傳三〇十三―十五。四〇八―十二、卅三。五〇廿九―卅二。八〇卅五。十〇卅八。十三〇廿三。十五〇十一以下。イエス、キリストの名こそ、實にこれ救贖の本體にしてこれを措いて、他にその道なきことは、弟子等の明かに知悉せし所也。使徒行傳四〇十二。

弟子等の今爲すべきは、傷に彼等が親しく見、親しく聞きし所のことを、人々に向つて證するに在り使徒行傳四〇廿。彼等はいつも人々に告ぐるに、只おのれらがキリストの證者たることゝ、殊に主の復活のまことなることを以てせり。使徒行傳二〇卅二三〇十五。四〇卅三。五〇卅二。尙ほ他のところを見れば、彼等がいかにキリストの證者として、忠實なりしかを察することを得べし、げに殉敎者なる語は、死を以てキリストの證者となれる彼等に向つて初めてこれを與ふることを得。使徒行傳廿〇廿四。五〇四十―四十二。提摩太後書六〇九。

かゝる證明がいかなる功果を生したりやは、使徒行傳六〇七。十二〇廿四。十二〇廿四に於ける『增し加はる』、『傳播る』の語を見て知るべし。かくてこ

の證明によりて、基督の死後一世紀を經ざるに、福音の道は諸方に擴張せらて、エルサレムより羅馬に及べり。使徒行傳廿八〇十六、卅。この證明によりて、神の國は、その版圖を今尙ほ人類の生活の上に開拓しつゝあるを見る。さればこの世の國々は、イエス、キリストのみ心に從ひて、まことの義しき樂園に化するの日あることを信ずるを得べし。哥林多前書三〇十一。默示錄十一〇十五。

今使徒行傳を研究する時に、我等は單に主イエス、キリストに關する證明を學ばんことを欲す。すべての信者は基督の如き人格を建設せんがために、この世の罪を敵として日毎に奮戰健闘する兵士ともいひつべし。提摩太後書二〇一―四。神は我等に機會を與へて、我等をしてキリストにつき、自ら見聞したる所を證せしめ給ふ。路加傳十二〇卅五―四十。

　詩篇十七〇十五。哥林多後書三〇十八。約翰第一書三〇十二。

詩篇十七〇十五に於て、我等はまことの希望のいかなるものなるかを學ぶ。これ果してわが心の希望と同一なりや。今我等は使徒行傳の研究に入らんとするの際、願はくは神我等を導きて、聖旨の存する所を諒得せしめ給はんことを祈る。

藻鹽草

吹よせき　　しのぶ

長かりし夏休を、故鄕に、海邊に、田舍に、山間に、樂しく淸くうち過ごして、今また各その働場に歸りぬ、我等はこの間に養ひたる新生命を以て、「しつかり」天國の爲めに働かざるべからず。然らざれば、折角夏休暇を與へ給ひし神に、いかで報ひ奉ることを得んや

。　。　。　。

近來何れの敎會にも女子の數非常に增加せりと聞くこれ婦人が大に精神的要求を感じ來れる結果なるべく

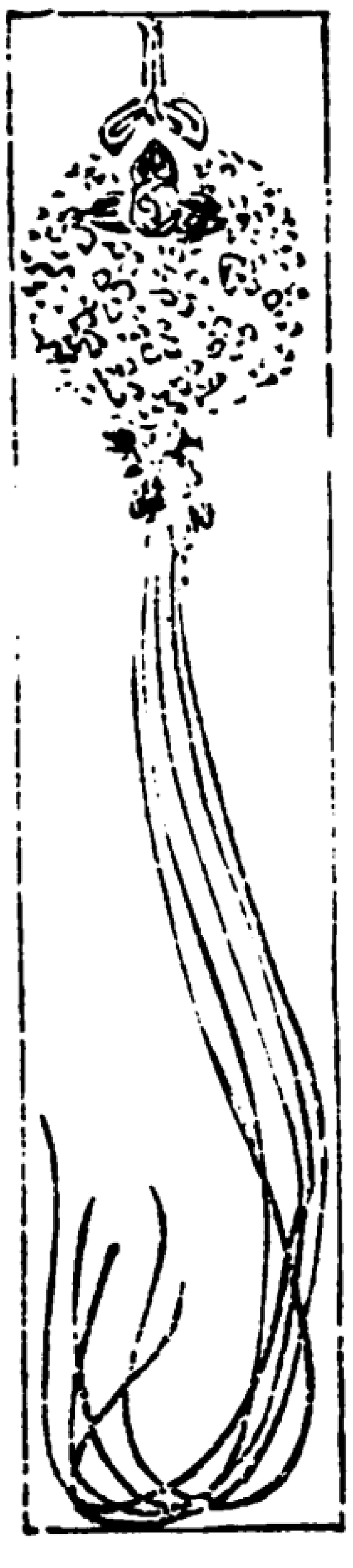
Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

實に感謝すべきことども也、此の時に當りて、我等先に選はれたる者は、神と人とに對する責任の極めて輕からざるを感せざるを得ず。

。　。　。　。　。

西洋の女と日本の女の相違

西洋の女は色は白くて、髮が黄色で、肉附が好くて、脊が高く、日本の女は色が黄で、髮が漆色で、痩せて脊が低い。西洋の女は、後に反つて、外輪に大股に歩き、日本の女は、前に僴んで內輪に小股に歩く。西洋の女は後ろで褄をとり、日本の女は前で褄をとる。西洋の女は能く談じ、日本の女は能く默す。西洋の女は思ふことを十倍にも表情し、日本の女は思ふことの萬分一も面へ出さぬ。西洋の女は男と交際し、日本の女は女と交際す。西洋の女は口に戀を說き、日本の女は心に戀を語る。西洋の女は娘の時よりも、妻になつてからが浮氣になり、日本の女は娘の時が浮氣で妻になると堅くなる。西洋の女は、山に登り、海に泳ぎ、舟を漕ぎ、馬に乘り、凡て室外の遊戲を好めど、日本の女は夫れと反對に、兎角外出が嫌ひ。西洋の女は亭主を使ひ、日本の女は亭主に使はる。西洋の女は剛腹、日本の女は柔順。西洋の女は多くの場合に於て「否」と答へ、日本の女は「諾」と答ふ。西洋の女は悍馬の如く日本の女は羊の如し。西洋の女は目で物を言ひ、日本の女は手で物をいふ。西洋の女は人前で亭主といちやついて、家に歸つてから喧嘩をする、日本の女は人前では他人行儀で、家に歸つてからいちやつく。西洋の女は亭主を靴で蹴り、日本の女は亭主の胸倉を取る。西洋の女は表面が清潔のやうで內部が不潔。日本の女は表面が不潔のやうで內部が清潔。西洋の女は男との間が近くて遠く、日本の女は遠くて近い。(中央新聞)



Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

them. So the Servant is exalted to the place of power because He has been submissive in the place of toil. He is still a worker.

Then I come to Luke, and what do I see? I see the Man coming down at the beginning, at last glorified, and the last picture I have of him is the Son of God going back into heaven, as a Man that has won a victory. And as I look heaven receives Him, earth worships Him. So ends the human story.

I expect something very great and very glorious when I come to the end of John, and, do you know, I find the most simple ending to John of any. When I get into John I find the same Person exactly, and He is contradicting Himself and never contradicting Himself; baffling me so that I cannot explain and yet wooing me so that I worship. When I get to John I find Him going and staying; tangible—"Reach hither thy hand and put it into the print"; intangible, He vanished while He waited. Far off from them and yet near to them; and I have found that God is simpler than man because of His very sublimity; and here I have gained my God. The Word is made flesh. I wanted it. I may be weak; I am like the rest of my kind. The far outreaching distances baffle me. He became flesh, and He said "Touch me, Thomas, handle me and see." These hands have never yet rested on that flesh, but I know at the center of the universe of God that Man still lives, not etheralized, vaporized sentiment, but,

"Warm, sweet, tender even yet,
A present help is He;
And faith has still its Olivet
And love its Galilee."

And these things find anchorage in the Man I see at the end of John, Who is God also. Going and staying, touched and I cannot touch Him, making breakfast for the tired fishermen—the mystery of love divine.

What more can I say? I might say much, but let me say this as we close these studies of the Christ of the gospels: May He be to us as never before King and Servant, for He girded Himself to serve His loved one,—ideal Man and very God. God help us to press on through the mystery for the little while, that at last we, near the throne, may be like Him.

Dr. G. Campbell Morgan.

At the Northfield Young Women's Conference held last July Dr. Morgan gave a course of Bible study on the four gospels. The above is condensed from one of the course as printed in the "Record of Christian Work."

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

with me at the *beginning* of each gospel, the *course* run in each gospel and the *ending* of each gospel. Matthew began with the genealogy of the King; Mark began with the introduction of the servant; Luke begins with the coming of the man; and John begins with the logos, the Word. The beginnings are all different and yet they all refer to to the same fact, to the beginning in human history of the existence of a Person different, but one. It is the same Person, it is the genealogy of Jesus Christ of Nazareth; it is the introduction of the Servant, Jesus of Nazareth; it is the birth into the world of the Man, Jesus; and Jesus is, according to John, the incarnation of the Word of God.

Now mark the *course*. You take Matthew. You have seen the King. He is attested King, He is rejected as King, He is crucified as King. I take Mark and I am now looking at the servant. I see the Servant weary in His work, neglected by those who ought to help Him, and at last murdered. I look at Luke and see the beginning, I see how His life condemns imperfection, and finally I see Him killed by evil men. I come to John and I have the Word of God manifested, criticized, rejected; so that wherever they begin everything leads up in all cases to the cross. The King can only find His kingdom by the cross; the Servant can only perfect His service upon the cross; the Man can only realize the highest dignity of His being by the cross; God can only fulfill His profoundest intention by the cross.

I come to the *endings* and the endings are as different as are the beginnings. Now someone has said that the story of the virgin birth is not true, or cannot be true because only two men told it. The story of the Ascension may not be true because all did not tell it. Take Matthew's ending. There is no story of ascending in Matthew. What is there? There is what you may speak of as the story of the Ascension. The last thing I see of this Person is that He is standing on a high mount with His disciples around Him. "All authority has been given unto me in heaven and on earth. Go ye, therefore, and disciple the nations." It is the King and the king is leading His hosts as they set up His kingdom among His people.

I come to Mark and what do I see? The Servant's service, work is finished. But almost as I rejoice that His path of toil is over, I find it said He is still at work. He commissioned His disciples to go and preach the gospel. This is how Mark puts it, and it is not a different *putting*; it is a different commission. There are four distinct commissions in your gospels. And *now* what do I read? The Lord working with

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

were? They were God's arms; and they are underneath you now."

"Oh, no, sister, they could not be God's. Why, if you but knew what I have been, you would never touch me: and God's arms could never be beneath *me*."

The sister moved away, only to renew the conversation at another time. And the poor, tired heart found rest at last in the Saviour whose Everlasting Arms are underneath our deepest sin and hate: and to-day he is spending his life in the telling of the story that is always new, of the "Eternal God who is a Refuge to the storm-tossed," and whose Arms "reach beyond our deepest woe."

So strengthened and helped, I returned to the dying child passed all aid of man, to sit down by her bed to tell in simple language of the Love that gave. Holding the frail hand in my own, I spoke distinctly, word by word, of the Father who loved her, and the Son who died. And the salt tears broke from the fast-closed eyes and rolled down the still white face. And whenever I told of the Love eternal there was the same response—the only sign that she understood, welcomed, or received God's unspeakable gift.

But I know that round the Throne I shall meet this poor child, to whom, when every other door of sense seemed closed, God spoke by His Spirit, and gently led her Home. —*Faith Links.*

THE LORD JESUS CHRIST.

The question is sometimes asked, Why are there four gospels? And the reply I should make is this, There are not four gospels. There is one gospel.

The whole evangel requires all four gospels, for the presentation of the evangel is the presentation of the person of Jesus Christ, and in these four gospels we have, as we have seen, four phases of that one personality.

In these four gospels I see this one great perfect Person, kingly and submissive, human and divine, a Person in the midst of human history, unique, different from all the races and yet fulfilling in outward expression the underlying potentiality and meaning of every other human life. One Person, perfect in His personality, is King and Servant, is God and Man, perfect in every single instance, and Who by the way of the cross leads men into a higher life which is not merely a life for them alone, but which may be communicated to others.

We might emphasize the little differences in these gospels which bring out the sublime difference and yet manifest sublime unity. Look

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

In one of our London hospitals, late at night, there was brought in a drunken accident. One of those swells about town, gentlemanly in dress and position, suffering from a terrible fall, resulting in injury to the brain. An operation had been decided upon to be performed immediately; not altogether without hope, but the scale must turn on a hair; and, left as he then was, nothing could save his life.

The sister, a Christian nurse, stood alone. There was no one near to look to, but God. The doctors had gone to prepare for their work, and soon would be returning, and then her opportunity would for ever be closed. The patient lay unconscious on the bed, while from his lips there poured a torrent of oaths and blasphemy, with every obscene thought. How helpless was she; how hopeless all appeared for him!

With a quick cry upward, she knelt down by his side, and, placing her lips to his ear, distinctly spoke these words: "*Underneath are the Everlasting Arms.*"

It was like a torn sail flung on the gale. The oaths and curses flowed unbroken on.

And yet she did not lose hope and faith in God. Again she cried in the face of this blast of hell: "*Underneath are the Everlasting Arms* And the curses stayed, while for a moment the poor wreck lay still; and a look of listening crept across the face. Then again the torrent broke.

Just then the doctors were reappearing at the far end of the ward. And again she knelt and repeated the self-same words: "*Underneath are the Everlasting Arms.*" And the man lay still; while through the operation following, no word, or oath, or moan, escaped him.

Strange to say, he recovered. For weeks he lay upon the brink of the grave, then slowly, returning strength, and reason, and health, were granted him. And ever as he lay unconscious on his bed, the only words he uttered were: "*Underneath are the Everlasting Arms.*"

"Do you know what you have been saying lying there?"

"No, sister. What was it?"

"You have been saying, 'Underneath are the Everlasting Arms.'"

"Yes, it comes back to me now. When I stumbled, I felt I was falling down, down, into hell; and then I heard a voice say distinctly, '*Underneath are the Everlasting Arms*': but I could not stop. And again the voice said, '*Underneath are the Everlasting Arms.* And then I stopped a while; but only to fall deeper, deeper still. But the voice came again, even louder than before, '*Underneath are the Everlasting Arms!*'—and I went no further."

"Do you know whose Arms those

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

still unsatisfied. None of these ever have satisfied or can satisfy the human heart; love alone can satisfy and according to the character of the one who bestows the love will the satisfaction be deep.

Eternal Love begets eternal satisfaction. The consciousness of the deep, tender love of God brings rest to the soul.

"I have loved thee with an everlasting love," is what He says. The great God—loves me—with an everlasting love. That means an outlasting love, doesn't it?

A love that will outlast my hate, my rebellion, my sin, my misunderstanding, my indifference, my selfishness, my failures, all my weaknesses, and yet remain the same deep, tender love. We crucified His only-begotten Son come in love to save us, yet His Holy Spirit still seeks an abiding place in our hearts. Oh. may we open to Him more and yet more and let Him love us as He wants to and find—as He has His way—that He has given us the deepest desires of our hearts.

THE EVERLASTING ARMS.

A TRUE STORY.

Do we ever pray for the sick and the dying? For those who in pain or unconsciousness are nearing the borderland, soon to pass beyond? Those who are passing, passing now, into a Christless eternity, with no hope? The sinned against and sinning, the weak and tempest-driven—wrecked souls cast on the rocks of a cruel world?

Perhaps we are numbed by the hopelessness of it all, and therefore we are silent: but there is one hope that lies open to us—we can pray; and where man is powerless to reach the soul through the gates of pain or unconsciousness, God's Spirit can break in with life and pardoning love.

One of the cases I was called upon to nurse was that of a young girl, which from the first was hopeless. Hopeless physically, and—I had almost said—hopeless spiritually also: for day and night she lay unconscious of what was passing around, slowly drifting on the ebb tide towards the sea. Could it be His will that she should pass out without sign or moan?

Oh how I prayed that some word might be given, some link established between her and the One who had died for love of her soul. When visiting a kind friend, who was greatly interested in my work, I told her all the story of my pitiful helplessness; and she, to encourage me, gave me the details of this singular case.

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

Young Women of Japan

Vol. II October, 1905 No. 6

LOVED!

Loved! then the way will not be drear,
For One we know is ever near,
Proving it to our hearts so clear
That we are loved.

Loved with an everlasting love
By Him who left His home above,
To bring us life, and light, and love,
Because He loved.

Loved, when our sky is clouded o'er,
And days of sorrow press us sore,
Still will we trust Him evermore,
For we are loved.

Loved, when we leave our native soil,
In heathen lands to live and toil;
Under His shadow nought can foil—
Still we are loved.

Time, that affects all things below,
Can never change the love He'll show,
The heart of Christ with love will flow,
And we are loved.

Loved in the past of yesterday,
And all along our future way.
And in the present of to-day—
Forever loved.

Loved when we sing the glad new song
To Christ, for whom we've waited long,
With all the happy, ransomed throng—
Forever loved.

LOVED

Isn't the deepest longing of the human heart a simple, child's longing to be loved?

Not every heart may be conscious of its own longing nor rightly interpret it when conscious of a longing but after wealth, pleasure, fame, power, service, and every other thing men usually seek after, have had their opportunity, the heart is

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

Young Women of Japan

Vol. II　　October 1905　　No. 6

The "Young Women of Japan" is a Bible Study Monthly for young women published by the Promoting Committee of the Young Women's Christian Association in Japan Price 50 sen a year. Four *sen*, five *rin* a copy. Address 15 Dote Sambancho Kojimachi, Tokyo.

Promoting Committee of the Young Women's Christian Association in Japan.

Miss M. A. Whitman, Chairman.
Miss Amy G. Lewis, Secretary.
Miss Ume Tsuda.
Miss A. B. West.
Mrs. G. K. Hanai.
Miss H. J. Worthington.
Mrs. V. W. Helm.
Mrs. G. M. Fisher.
Miss L. Hamilton.
Mrs. G. S. Phelps.
Miss L. Zurfluh.
Mrs. H. Kozaki.
Miss H. Hirano.
Miss S. Ellis.
Miss E. M. Soper.
Miss Kawai.
Miss Kin Sato.

Miss A. Caroline Macdonald
Miss Theresa E. Morrison } Secretaries of the World's Young Women's Christian Association in Japan

Digitized by Google　　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

明治三十八年十月一日發行

明治三十七年五月七日第三種郵便物認可

"That we may grow up in all things into him, who is the head, even Christ." Eph. 4. 15.

Vol. II October 1905 No. 6

YOUNG WOMEN OF JAPAN

CONTENTS.

English.

Loved

The Everlasting Arms.

(The Lord Jesus Christ)

Japanese.

Editorial.

Bible Study. A. C. Macdonald.

The Sins of the Disposition. T. Idsuno.

Some Thoughts on the New Term. Kin Sato.

15 Dote Sambancho, Kojimachi, Tokyo.

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA